

リオタールの時間哲学
——貨幣・歴史・想像力——

小泉空（大阪大学大学院人間科学研究科）

本発表の目的は、フランスの思想家ジャン＝フランソワ・リオタールの時間哲学を、彼の二つの主著『リビドー経済』（1974）と『ポストモダンの条件』（1979）を主要テキストとして抜き出すことである。

リオタールは、オイルショックやニクソンショックなどにより、世界経済に大きな転換が起きた70年代に、『リビドー経済』という特異な経済哲学の書を出した。彼はここで、フロイト由来のタームを用いながら、いくらか当時の経済危機をアンビバレントに肯定するかのような分析を打ち出した。そして『リビドー経済』から5年後、リオタールは、彼の名を一躍有名にすることになる書『ポストモダンの条件』を出すことになる。ポスト産業社会における知の状況を主題としたこの本の中で、リオタールは、大きな物語（歴史）の終焉という名高い命題、差異に対する開かれとしての「正義」論（後に『文の抗争』（1984）に結実することとなる）を打ち出した。

先行研究において、この二つの著作のあいだには断絶があるというのがいくらか通説となっている（例えばジェイムズ・ウィリアムズ、*Toward a Postmodern Philosophy*（1994））。なぜなら一方で『リビドー経済』が精神分析的なタームで覆われ、倫理的観点が希薄であるのに対して、『ポストモダンの条件』では精神分析的タームは消え去り、いかにして現代的倫理を打ち出すかという観点が存在しているからである。近年の『リビドー経済』への着目（例えばベンジャミン・ノイズ、*Malign Velocities: Accelerationism and Capitalism*（2014））においても、そこに後のリオタールの仕事にないラディカリズムを見るという視点が主流となっている。

しかし本発表は、この二つの著作においては「時間」という問題系が一貫して追及されていると主張する。その理由は三つある。第一に『リビドー経済』でリオタールは、「貨幣」を長期的時間サイクルで流通する信用貨幣と短期的時間サイクルで流通する支払貨幣に分けているのだが、この区別は『ポストモダンの条件』における知識の区別、長期的なプロジェクトのための投資用知識と職をえるための支払い用知識の区別に対応しているということ。第二に『リビドー経済』でリオタールは、70年代の経済状況を、自由主義が乗り越えたとしてきた重商主義の「回帰」とみなすのだが、この視点は、『ポストモダンの条件』における大きな物語の終焉という命題を先取りしているということ。第三に『リビドー経済』でリオタールは博打的な「投機」を肯定し、『ポストモダンの条件』では異質なものを結びつける「想像力」を肯定するのだが、そのどちらも「いま、ここ」における瞬発性という時間的観点で定義づけられているということ。以上、三つの理由から本発表は、『リビドー経済』と『ポストモダンの条件』を、時間哲学という主題からつなげることは可能だと主張する。